



農事普及だより

(7月号 平成27年7月1日～7月31日)

《発行》鶴田町／鶴田町農業支援センター／鶴田町産業観光課
つがるにしきた農業協同組合鶴翔統括支店
西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室
《編集》西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室



天候

(平成27年6月24日 仙台管区気象台発表 東北地方3ヶ月予報より)
平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。



中干して「根づくり」、幼穂形成期深水かんがいで「花粉づくり」、適正追肥で「買ってもらえるおいしい米づくり」を進めよう。

1. 生育状況

6月20日現在の県生観ほの生育は「まっしぐら」、「つがるロマン」の両品種とも草丈がほぼ平年並み、㎡当たり莖数が平年より多く、葉数が平年よりやや多い。

2. 水 管 理

(1) 中 干 し

ア 中干しは、窒素の過剰発現や草丈の伸びを抑制する効果があるので、1株当たり20本程度（栽植株数が70～80株／3.3㎡の場合）の莖数を確保し、平均気温が20℃以上の好天が続く場合に実施する。

イ 中干しは、田面に軽くひび割れが入る程度とし、排水不良の水田では、2回くらい繰り返すと効果的である。幼穂形成期前には必ず終了する。

ウ 生育が遅れている場合は、中干しを行わずに生育の促進を図る。

エ 中干し中に低温が続く場合は、中干しを直ちにやめ、深水状態にして、稲を低温から守る。

(2) 幼穂形成期の深水管理

幼穂形成期（主茎の幼穂長2mm）から約10日間は、稲の吸水量が多くなるとともに、花粉のもとがでる重要な時期なので、水深10cmの「幼穂形成期深水かんがい」を行って幼穂を保護し、花粉数の増加を図る。

(3) 穂はらみ期の水管理

ア 「穂はらみ期」に当たる出穂前15～7日頃（主茎の葉目間長がマイナス12cmからプラス4cmの頃（「図1 葉目間長の見方」参照）は、最も低温に弱いため、日平均気温20℃以下、日最低気温17℃以下の低温になると予想される場合には、可能な限り深水（15～20cm程度）にして幼穂を保護する。ただし、冷水を急に入れたらえって温度が下がるので、徐々に水深を深くするとより効果的である。

イ 高温時は、4cm程度の浅水にして水温の上昇を促し、時々水の入れ換えを行い、根の老化を防止する。

表1 これからの水管理

生 育 期	寒い日の水深	暖かい(暑い)日の水深	備 考
6月末～7月中旬 (幼穂形成期前)	5～6cm程度	中 干 し	中干しは幼穂形成期前に終える。
幼穂形成期から 10日間	深水かんがい 10cm		日平均気温20℃以下、日最低気温17℃以下で、障害不稔発生の危険が増す。
出穂15～7日前 (穂はらみ期)	15～20cm	4cm程度 時々水の入れ換え	

3. 追 肥

(1) 追肥時期

幼穂形成期（主茎の幼穂長2mm）に達し、かつ肥料が切れて葉色が淡くなっていれば追肥の適期である。幼穂形成期に達しても葉色が濃い場合は、幼穂形成期後7～10日までの間に葉色が淡くなったら追肥する。幼穂形成期後10日までに葉色が淡くならない場合は、追肥を中止する。出穂前後の追肥（実肥）は、米の食味・品質を低下させるので行わない。

(2) 追 肥 量

「つがるロマン」では生育状況を見ながら窒素成分で10a当たり2kg以内、「まっしぐら」では2～3kg程度とする。

4. 病害虫防除

(1) 斑点米カメムシ類

ア 水田周辺の休耕田や畦畔・農道等の雑草地に生息しているので、雑草が開花・結実しないよう刈取や耕起をこまめに行う。なお刈取等は出穂2週間前（7月中旬頃）までに終了する。

イ 水稲の出穂以降に雑草を刈り取る必要がある場合は、斑点米カメムシ類に効果のある殺虫剤を散布した後速やかに行う。

ウ ノビエ、シスイ、クログワイの多発田では、水稲の出穂前から斑点米カメムシ類が水田内に誘引され、斑点米率が高くなるので、除草や防除を徹底する。

(2) 葉いもち

葉いもちの初発生は、近年、6月末から7月上旬に確認されているので、初発状況に十分注意し、病気が見つかりしだい初期防除を徹底する。

早期発見・早期防除が基本であり、発生を確認したらすぐに防除する。

(3) 穂こうじ病

穂はらみ期の低温や日照不足、多雨で発生しやすくなるので、前年発生した水田を中心に、出穂20日前～10日前に防除を行う。

防除時期が遅れる（出穂10日前以降）と防除効果の低下や葉害の恐れがあるので注意する。

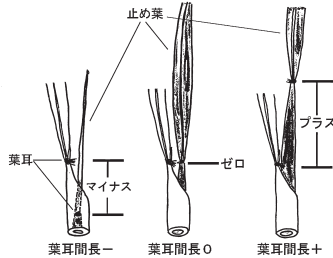


図1 葉目間長の見方

葉目間長の見方
(松島省三による)

りんご

ていねいな見直し摘果で良品生産を！！

りんご（ふじ）の肥大は、6月21日現在（県生観ほ板柳町高増）横径3.9cm、平年比126%で10日程度進んでいる。

1. 摘果の見直し

見落とし部分、サビ果や奇形果、小玉果等の品質不良果がないかを再度見回り、ていねいな見直し摘果に努める。

2. 袋 掛 け

有袋栽培はつる割れの軽減や収穫作業の分散、販売戦略上も必要である。特に本年は大玉傾向で、夏場の多雨によりつる割れの発生が懸念されるので、有袋栽培に積極的に取り組む。

袋掛けは、7月10日頃までに終える。

3. 徒長枝の整理と支柱入れ

病害虫の発生源を少なくし、薬剤の付着を良くするために不要な徒長枝を整理するとともに、支柱入れや枝つりを行って樹の内部にも十分日光を入れて葉の働きを良くする。

4. 病害虫防除

斑点落葉病やモモシクイガ、ハダニ類の増加期に入るので、発生動向に十分注意して散布間隔をあけずにスケジュール散布を行う。

(県りんご防除暦より抜粋)

時期と散布量	主な対象病害虫	基 準 薬 剤
7月初め (7月1～2日) (500㍒/10a)	斑点落葉病 ハダニ類 モモシクイガ キンモンホソガ	ピレスロイド剤
		ブラウ水和剤 1,000倍
		又はアントラコール顆粒水和剤 500倍
		又はユニックスZ水和剤 500倍
		又はチウラム剤 500倍
		又は有機銅剤 1,200倍
7月半ば (7月16～17日) (500㍒/10a)	斑点落葉病、褐斑病 ハダニ類 モモシクイガ リンゴコカクモンハマキ	又はオキシラン水和剤 500倍
		アントラコール顆粒水和剤 500倍
		又は有機銅剤 1,200倍
		又はオキシラン水和剤 500倍
		又はアリエッティC水和剤 800倍
		又はアリエッティC水和剤 800倍
7月 末 (7月31日～ 8月1日) (500㍒/10a)	斑点落葉病 褐斑病 キンモンホソガ ハダニ類 モモシクイガ	ペフラン液剤25 1,500倍
		又は有機銅剤 1,200倍
		又はオキシラン水和剤 500倍
		又はアリエッティC水和剤 800倍
		又はダイパワー水和剤 1,000倍
		又はフリントフロアブル25 3,000倍
		又はストロビードライフロアブル 3,000倍
		又はナリアWDG 2,000倍
		又はナリアWDG 2,000倍

(1) 腐らん病

粗皮感染による胴腐らんの発生が多い園地では、「7月半ば」又は「7月末」にトップジンM水和剤1,500倍又はベンレート水和剤3,000倍も使用すると、褐斑病と同時防除できる。

(2) 斑点落葉病

随時、不要な徒長枝を剪去する。

急増の恐れがある場合は、ユニックス顆粒水和剤47 1,500倍又はポリオキシナAL水和剤1,000倍も使用する。

(3) 褐 斑 病

前年発生が多かった園地では、「7月半ば」又は「7月末」のいずれかにトップジンM水和剤1,500倍又はベンレート水和剤3,000倍も使用する。なお、斑点落葉病対策としてユニックス顆粒水和剤を使用する場合は、こ

の時期の褐斑病防除の強化対策は必要ない。

(4) モモシクイガ

無袋栽培では毎回防除剤を散布する。

7月初めに食入防止期間の長いピレスロイド剤（ピレスロイドEW、サイハロン、イカズチ）を散布した場合でも、モモシクイガやナシメシクイの発生が見られている園地や周辺に発生源がある園地では、7月半ばのモモシクイガ防除薬剤を省略しない。

(5) リンゴコカクモンハマキ

第1世代幼虫の発生が多い園地では、フェロモントラップを利用して適期にサムコルフロアブル5,000倍、フェニックス顆粒水和剤4,000倍、ディアナWDG10,000倍のいずれかを散布する。

(6) クワコナカイガラムシ

発生の多い園地では、7月中旬～下旬に防除剤による胴木洗いを手散布で行う。

また、6月下旬にバンド巻きをした園地では、7月中旬（卵のふ化前）に忘れずにバンドを除去する。

(7) ハダニ類

殺ダニ剤は発生状況に応じて散布する。

薬 剤 名	使用倍数	使用回数	使用時期	リンゴハダニ	ナシハダニ
サンマイト水和剤	1,500倍	2回以内	収穫21日前まで	○	×
バロックフロアブル	2,000倍	2回以内	収穫14日前まで	○	×
オマイト水和剤	750倍	1回以内	収穫3日前まで	○	○
ダニサラバフロアブル	1,000倍	2回以内	前日まで	○	○
コロマイト乳剤	1,000倍	1回以内	前日まで	○	○
マイトコーネフロアブル	1,000倍	1回以内	前日まで	×	○
ダニゲーターフロアブル	2,000倍	1回以内	前日まで	○	○
スターマイトフロアブル	2,000倍	1回以内	前日まで	○	○

(散布の目安)

- 1園地10樹について、リンゴハダニは目通りの高さの新梢中位葉10枚、ナシハダニは主幹や主枝から発出した新梢中位葉10枚をルーペ等を用いて観察する。
- 1葉当たり2個体以上あるいは、半分の葉にハダニが見られる場合には、早めに殺ダニ剤を散布する。

5. ビタービット対策

ビタービットは、幼果期（6月）の少雨や夏期を中心とした生育期間の高温によって発生が多くなる。本年は春からの小雨、かつ大玉傾向によりビタービットの発生が懸念されるため、カルシウム剤の果面散布を積極的に行う。

○カルシウム剤の使い方

資 材 名	散布時期（散布間隔）	資材形状	倍数	散布回数
ス イ カ ル	6月上旬～9月中旬（10日以上）	粉状	300倍	3～5
セ ル バ イ ン	6月上旬～9月上旬（10日以上）	粉状	400倍	3～5
アグリメイト	6月上旬～9月中旬（15日以上）	液状	500倍	5

※樹勢の弱い樹や高温時、あるいは干ばつ時には葉害発生（葉縁褐変）の恐れがあるので避ける。

ぶどう

摘房、摘粒により商品価値の高い房に仕上げましょう！

生育観測ほのスチューベンほ、開花日が平年より12日早い6月12日、満開日が12日早い6月14日となった。生育が大幅に進んでいるので、生育状況を見ながら、房づくりや病害虫防除などの作業を適期に行う。

1. 果房の整形

果粒が小豆粒大頃（果房中間の粒径が5mm程度の頃）に果房の先端を1cm程度切除するとともに、果房の長さが12～13cmになるように果房上部の支梗を切除する。さらに、果房の幅が6cm程度になるように長い支梗を切りつめる。

2. 摘 房

新梢と果実との養分競合を少なくし、品質向上と枝の充実を促すために早めに行う。

着房数は下表を参考にし、実どまりの状態や結果枝の葉数を見ながら調節する。

(着房の目安)

品 種	結果枝の葉数	着房数
スチューベン、 キャンベル・アーリー	13枚以下	ならせない
	14～18枚	1房
	20枚前後	1～2房
	25枚以上	2房

3. 摘 粒

(1) 摘粒の時期

果房形を整え、粒揃いや果粒肥大を促進するため、満開後15～25日頃（7月上旬）から始め、果粒軟化期前（8月上旬）までに終える。

(2) 摘粒の目安

品 種	果粒数
スチューベン	70～75
キャンベル・アーリー	60～70

4. 2回目の摘心

1回目の摘心後に伸びた副梢の展葉枚数が8～9枚になった頃に行い、1回目の摘心後に伸びた副梢の葉を6枚

残して摘心する。副々梢は2回目の摘心部位の先端のものだけを残して、他は全てかき取る。
なお、これ以降も副々梢が伸びる場合は3～5葉で摘心を行う。

5. 病害虫防除

スチューベン®の生育が大幅に早まったことを受け、今後の薬剤散布は、通常の「大豆粒大（7月中旬頃）」の薬剤散布を、「大豆粒大（7月上旬頃）」と「7月中旬」の2回に分けて行うことと対応する。
（県どう防除暦：スチューベン基準より抜粋）

散布時期	薬 剤 名 と 倍 数	
	殺 菌 剤	殺 虫 剤
大豆粒大 （7月上旬）	ジマンダイセン水和剤 1,000倍	
（7月中旬）	ジマンダイセン水和剤 1,000倍 又はアミスター10フロアブル 1,000倍 又はストロビードライフロアブル 2,000倍 又はホライズンドライフロアブル 2,500倍	アグロスリン水和剤 2,000倍 又はアディオンフロアブル 1,500倍

- (1) 大豆粒大以降、展着剤は使用しない。
- (2) 晩腐病の発生が多い圃地では、小豆粒大頃にベンレート水和剤3,000倍を特別散布する。
- (3) アミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル及びホライズンドライフロアブルは同じ系統の薬剤で、薬剤耐性の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。
- (4) ハダニ類の発生が多い圃地ではマイトコ-ネフロアブル1,000倍又はカネマイトフロアブル1,000倍を特別散布する。なお、本剤は8月以降に散布すると果面汚染の恐れがある。
- (5) コガネムシ類の発生が7月下旬にみられる場合は、アグロスリン水和剤2,000倍、アディオンフロアブル1,500倍、スミチオン水和剤40～800倍のいずれかを特別散布する。

※農業はぶどう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。





おとう



次年産の生産を見据え、収穫後の防除を徹底しましょう！

1. 収穫（晩生種）

本年は果実熟度が進んでいるので、適期収穫に努め、収穫遅れにならないようにする。

2. 雨よけ被覆資材の除去

樹体に対する悪影響を避けるため、収穫後速やかに除去する。

3. 施肥（礼肥）

樹勢維持と花芽分化促進のために、収穫後できるだけ早く予定年間施用量の20%を施用する。

4. 病害虫防除

- (1) 南陽やサミットなどの晩生種では、灰星病対策として収穫前日までにアミスター10フロアブル又はプリアWDOGを特別散布する。
 - (2) 褐色せん孔病（せん孔病）やハダニ類が発生すると早期に落葉し次年産の花芽形成に影響するので、収穫後散布を必ず実施する。
- （県おとう防除暦：佐藤錦基準より抜粋）

散布時期	薬 剤 名 と 倍 数	
	殺 菌 剤	殺 虫 剤
7月中～下旬 （収穫後）	オーソサイド水和剤80 800倍 又はオキシラン水和剤 600倍 又はチウラム剤 500倍	スプラサイド水和剤 1,500倍

※農業はおとう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。





野菜





トマト

天候に合わせた肥培管理を行うとともに、病害虫防除を徹底しましょう。

1. 追肥及びかん水

- (1) 7段花房開花期頃までは、定時（8～10時の間）、定量（1株1.5ℓ）のかん水を心がける。
- (2) 追肥は、樹勢をみながら2～3日おきに窒素成分で0.3～0.5kg/10a行う。特に草勢が衰えてきている場合は早めに行う。
- (3) 予想最高気温が28℃以上になる日は換気を徹底し、かん水量を1株当たり2ℓに増やす。萎れた場合、直ちに1株当たり0.7ℓかん水し2～3時間経過しても萎れが著しい場合は再度0.7ℓかん水する（高温時は1株1ℓを2回）。

2. 高温対策

遮光資材、ハウス塗布資材等を活用して、ハウス内の温度をできるだけ下げようにする。被覆タイプの遮光資材は、概ね11時～14時頃まで展張し、かけっぱなしにはしない。

3. 病害虫防除

曇雨天が続くと灰色かび病の発生や葉かび病への感染が懸念されるので、予防防除に努める。虫害は、アザミウマ類の発生が多くなるのでほ場を観察し防除する。

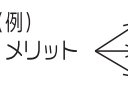


メロン

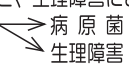
適切な温度・水分の管理で品質向上に努めましょう。

1. ネット発生後の管理

- (1) ネット発生以降は、最高気温28～30℃ 最低気温15～18℃を目安に管理する。
- (2) ネット完成時は換気を十分にを行い、日中しおれない程度にやや乾燥気味の管理とする。
- (3) 追肥は葉色や孫づるの伸長を見て10a（500本）当たり窒素成分で1～2kg実施する。
- (4) 葉面散布剤の活用：3～5日おきに3回程度散布する。

- (例) 
- 青 …… 生育促進、葉色改善 (7-5-3)
 - 黄 …… 着果促進、果実・根茎肥大 (3-7-6)
 - 赤 …… 成熟促進、徒長抑制、花芽分化 (0-10-9)
- (5) 成熟期の草姿・草勢は、収穫7～5日前で、「晴天日の昼間には少ししおれ、夜には回復するくらい」が望ましい。
 - (6) 最低気温が20℃以上では糖度が上がりにくくなる。

2. 果実の生理障害

- (1) 裂 果
着果後、低温多湿の場合、果肉の肥大に果皮の伸びが追いつかなくなると発生するが、鶏卵大前まで・ネット形成期・収穫期の3つのステージが特に危険性が高い。
○収穫期の裂果
 - ・開花後40日頃まで肥大するが、この間の乾燥・低温+成熟期の潤沢な養水分で発生する。
 - ・多肥や未熟な堆きゅう肥の施用により収穫期に草勢が強まり発生する。
 - ※対策として …… Ca剤の葉面散布、下葉の除去、徒長枝の除去
- (2) 発酵果
窒素・カリ過多、Ca不足、高温・照り込みによる草勢の低下、ホルモン着果、低温・乾燥による初期肥大の抑制などにより発生する。
※対策として …… Ca剤の葉面散布、遮光
- (3) 腐敗果
病原菌によるものと、生理障害によるものと2つある。
※対策として 



大豆



中耕培土・害虫防除をしっかり行いましょう。

1. 中耕・培土

- (1) 中耕は根に空気を通し、根粒菌を有効に活動させるために行う。は種後3～4週間頃から実施し、その後2～3回、10～15日おきに行う。
- (2) 培土の1回目は本葉2～3葉期に行い、初生葉のつけ根まで軽く土寄せする。
- (3) 培土の2回目は本葉5～6葉期に行い、第1本葉のつけ根まで土寄せする。
- (4) 最終培土は、開花10日位前（7月20日頃）に終える。培土の高さは、コンバイン収穫時に支障がない程度とする。

2. 除 草

- 発生している雑草の種類、大きさ、大豆の生育状況に合わせて除草剤を効果的に使用する。
- (1) イネ科選択性除草剤の茎葉散布
雑草が大きくなると効果が劣るので、各薬剤の使用時期の範囲内で使用する。
 - (2) 広葉選択性除草剤の茎葉処理
「大豆/サグラソ液剤」は大豆の2葉期以降に使用できるが、雑草が大きくなると効果が劣るので、発生状況に応じて使用する。
 - (3) 畦間、株間処理
土壌処理、茎葉処理を行っても残草が多い場合は、畦間、株間処理除草剤が利用できるので、薬剤の特性に合わせ効果的に利用する。大豆に薬剤が付着すると薬害が発生するため、泡状ノズルやカバーで飛散しないよう散布する。

3. 追 肥

- (1) 時 期
ア 徒長を防止し、子実の充実の効果を高めるため、主茎の伸びが止まる開花期に実施する。
イ 生育が旺盛な場合は行わない。
- (2) 追肥量
ア 窒素成分5～8kg/10a
イ 生育状態に応じて加減する。



小麦



良品小麦確保のため、適期刈取りに努めましょう。

1. 収穫作業

- (1) つがる市での出穂期は「ネバリゴシ」で平年より12日早い5月10日、「キタカミコムギ」で平年より10日早い5月12日であった。
 - (2) 「ネバリゴシ」は出穂後46～50日、出穂後積算気温830～950℃、「キタカミコムギ」は出穂後50～55日、出穂後積算気温900～1,000℃が刈取適期であり、共に子実水分25%を目安とする。
 - (3) 「キタカミコムギ」は穂発芽しやすいので、天候しだいでは水分30%での刈取が必要になる。この場合は速やかに乾燥機に張り込み、水分25%までは送風温度を40℃以下にして品質低下を防ぐ。
- （積算気温からみた収穫期の目安）

出穂期	ネバリゴシ		キタカミコムギ	
	830℃	950℃	900℃	1,000℃
5月10日	6月27日	7月2日	7月1日	7月5日
5月15日	7月1日	7月6日	7月4日	7月8日

注）五所川原アメダス値（6月22日以降は平年値）で算出
天候やほ場の成熟状況、水分を確認して刈取時期を判断する。



花き



病害虫の発生しやすい時期です。
ハウスの温度管理と病害虫の防除を徹底しましょう。



キク

1. 今後の作業（輪ギョウ）

- (1) 上位葉のわき芽かきは、時期が遅れると摘み取った後の傷が大きくなり、品質低下の要因となるので早めに行う。
- (2) 摘蕾は、小豆大の頃に中心の蕾を残して行う。

2. 病害虫防除

- (1) 白さび病、ハダニ類、アザミウマ類、ヤガ類が発生しやすい時期なので、早期発見、早期防除に努める。特に、親株管理を徹底し、定植ほ場に持ち込まない。
- (2) 薬剤は系統の異なるものをローテーションで使用し、薬剤抵抗性の発達を防ぐ。



トリコギキョウ

1. 今後の作業

- (1) 夏季は、十分な換気に努め、可能な限り施設内の温度を下げる。好天が続く場合、短時間遮光（遮光率20～50%）するとよい（遮光資材の除去は日射の弱い時に行う）。
- (2) かん水は、発蕾期に達しているものでは徐々に控えるが、莖葉伸長中のものは多めに行う。
- (3) 地際から20cmくらいまでの側枝を摘み取り、主茎の生長を促す。摘除は、主茎の付け根まで注意して除去しないと、再び側枝が上がってくる。
- (4) 主茎の頂花蕾（1番花）は早めに除去する。また、収穫の約10日前には出荷時に不要な蕾を除去して切り花品質の向上に努める。

2. 病害虫防除

灰色かび病、アザミウマ類、ヤガ類の早期発見、早期防除に努める。

5～8月は「農業危害防止運動」実施期間です

- 安心な農産物生産のため、農業使用状況を必ず記録しましょう。
- 農業使用の際には、必ず使用者の責任で最新の「農業登録情報」を確認しましょう。
- 短期暴露評価の導入により使用方法の変更が予定されている農業は、容器に表示された使用方法ではなく、変更後の使用方法に基づいて使用しましょう。

【農業の相談はこちらへ】

農業についての各種相談を受け付けております。受付した内容は即時対応いたしますので、気軽にご相談ください。

鶴田町農業支援センター「豊明館」となり
午前9時から午後5時 ☎ 22-2111（役場産業観光課）

××× わらの焼却はやめましょう ×××